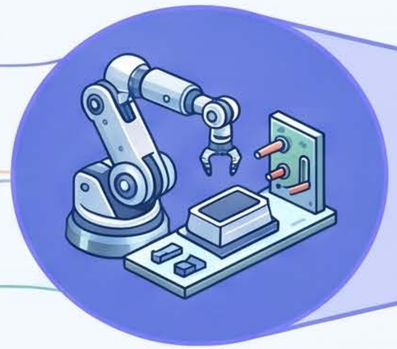
フィジカルAIにおける日本の勝ち筋：技術保有から「総費用削減」への戦略転換

日本の製造業・ロボティクスの強みを、単なる技術保有ではなく「導入・運用の総費用削減」と「収益化」につなげるための戦略的視点を提示する。

ギャップの認識（技術可能性と経済性の乖離）



74%

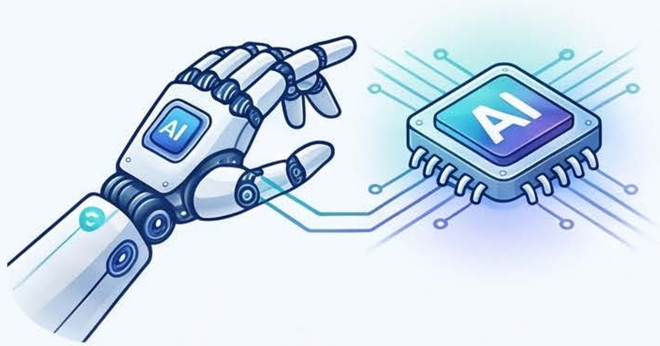
0.3%

対応可能作業 74% に対し、採算可能範囲はわずか 0.3%

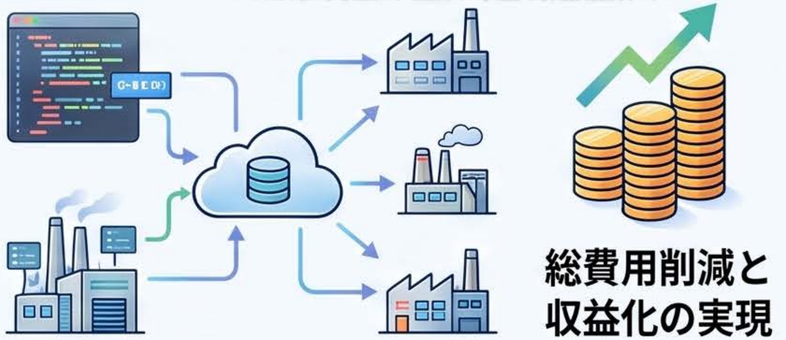
技術的に可能な範囲と、経済的に見合う範囲には巨大な乖離が存在する。

普及の主たる障害は「物理操作能力」と「導入・環境構築コスト」

AI の推論不足が原因の作業は 8%に過ぎず、約半数は物理的な操作能力が課題となる。







総費用削減と収益化の実現

1 触覚・精密機構と AI を一体開発し、動作と品質を安定化

部品単体の性能だけでなく、接触状態の認識と修正を含むシステム全体で低コスト化を因る。

2 日本独自の「すり合わせ」を標準化・共通ソフトウェアへ変換

現場ごとの個別調整を減らし、既存設備や治具の共通化で立ち上げ時間を短縮する。

3 現場データを他拠点・他機種へ移転可能な「共通資産」化

単一工場のノウハウに留めず、複数現場で再利用できるデータ形式と権限設計を行う。

Gemini Notebook